

大和桜井

見て歩ル記



第二十回 『菅笠日記』と歩く桜井(その一)

菅笠日記

江戸時代の国学者・本居宣長は四十三歳の時、松阪から奈良の吉野山の花見を兼ねて吉野水分神社に参詣し、帰路は飛鳥周辺の史蹟を探索しつつ伊勢本街道を通って松阪に帰郷した。その十日間の旅の記録が『菅笠日記』である。

この書物は吉野や飛鳥を巡るときの指南書として後の人々によく読まれ、今でいうところのガイドブックとして親しまれたという。

それでは『菅笠日記』をお手本に桜井市内を歩いてみよう。さてさて、どんな風景と出会えることやら。



札の辻の道標

あぶらや旅館

本居宣長が歩いた桜井

『菅笠日記』は明和九年（一七七二）三月五日から十四日までの十日間の旅の記録である。その内、桜井市内は往路では三日目、復路では八日目に桜井市内を通っている。

宣長はこの三日目の前日、宇陀市榛原の「あぶらや」を宿としており、夜間に雨風が激しいことをいたく気にしていた。目的にひとつに吉野山の桜見物があったため、桜とはかくも日本人の心をそぞろにさせるものであるらしい。

そうだ。今回は近鉄電車に乗って榛原駅からスタートしてみよう。本居宣長が見たであろう風景を探しにゆくのだ。

宣長の常宿「あぶらや」

うつしてもゆかまし物を咲花のをりたがへたる萩はらの里

榛原駅を降りて古びた商店街を通る。近鉄電車の高架をくぐりしばらくすると宣長が宿泊したと名高い旧旅館「あぶらや」がある。伊勢本街道と伊勢表街道（あを越え）の分岐点でもあるこの辺りは「札の辻」と呼ばれている地



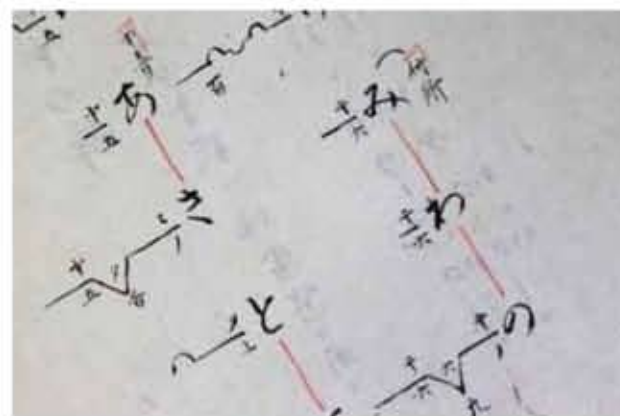
常夜燈

日本という国に生まれながら、
その音楽について、私達はどれほど
知っているのだろうか。音楽を通して、日本人が
大切にしてきたものを探る。

音楽の ふるさとを訪ねて

——奈良から日本音楽の旅に出る—— 第十一回 大神神社「磯城の舞」

文 堀内 みさ
写真 堀内 昭彦
協力 大神神社



大神神社の大祭神楽「うま酒みわの舞」の譜

清々しい白木の三ツ鳥居の前で、輪
舞（＝白い輪を付けた櫛の枝）を手に
した巫女たちがゆったりと舞う。添え
られるのは、少しくぐもった声で歌わ
れる典雅な歌と、声に寄り添うように
奏される箏や笛。歌の合間には、ピ
シリと張りのある笏拍子や、奥ゆかし
い響きの和琴がところどころ鳴らされ
る。

大和国一之宮、大神神社の摂社、櫛
原神社。天照大御神を祀るため奏さ
れる歌舞「磯城の舞」を見た。雅で
たおやかな美しい舞。だが、それ以上
にそのとき強く印象に残ったのは、神
前という特別な場で、しかも多くの参
列者が見ている中で、巫女たちが深い
落ち着きを持って、ゆったりとした所
作一つひとつを、丁寧に、心を込めて
舞っている姿だった。いや正確に言う
と、舞っているときの「心の在りよ
う」というものに、強く興味を抱いた
のだった。

がちだが、ゆったりとした曲を滑らかに
弾くには、早い曲を弾くときとは異な
る指の筋力が必要で、何より、ゆっく
り進むときの瞬間を切り取っても、音に
心がびたりと寄り添っていないければ、
形骸化した抜け殻のような演奏になっ
てしまう。ある意味、早い曲をミスな
く弾くよりも骨が折れることなのだ。
音楽コンクールでも、難度の高い曲を
ばりばり弾く人が、ゆったりとした曲
になった途端、「心ここにあらず」と
いうような、無機的なつまらない演奏
をするケースも少なくない。それだけ
ゆっくりとした曲を人前で演奏するには、
技術的なことはまた別の、心の修練
のようなものが必要なのだろう。

うと、崇神天皇聖徳奉賛会が立ち上げ
られ、顕彰運動を盛り上げようとして
いました。その中で磯城の舞は作られ
たのです。大神神社の広報課長、平
岡昌彦さんは言う。記紀神話によれば、
崇神天皇は天神地祇（＝すべての
神々）を厚く祀り、大三輪の神の意を
政治に生かし、国に平安と繁栄をもた
らしたとされる。明治時代、桓武天皇
を祀る吉野神宮など、天皇を祀る神社
が相次いで創建されたことから、崇神
天皇をお祀りする神社も造らなければ
という運動が、当時盛り上がりを見せ
たのだという。「磯城の舞」の「磯
城」も、崇神天皇の宮跡、「磯城瑞垣
宮」から引用されている。「ですから、
『磯城の舞』の舞自体は古くはないん
です。ただ、歌の詞章は古いですよ。
参進と退出のときの歌は、平安時代に
編纂された『古語拾遺』に出てくるも
のですし、舞のときの歌は多家に伝わ
る秘曲です」。平岡さんは言う。意味
についても、参進、退出のときの歌は、
「天照大御神様がはじめて宮中から外
にお出ましになり、無事橿原の笠縫の
場所にお遷りになった。それで、みん



三ツ鳥居の建て替えが完成したことを祝う祭典で奉納された磯城の舞。

山気 佳日々

36 伯母子岳

文・イラスト 橋尾歌子

さんきけいじつ

十津川ぞいの国道と山間の県道や峠道を経て、和歌山県との県境近く、山深い大股の集落に着いた。ずいぶん遅くなってしまった。高野山方面からの登山道から、ひとりの男性が降りてきた。

熊野古道のひとつである小辺路は、高野山と熊野本宮大社のふたつの聖地を結ぶ参拝道だ。全長七二キロの行程の中に、三つの一千メートル級の山と三つの溪谷があり、行程が長いのでふたつに区切って歩く人も多い。高野山から伯母子峠を経て三田谷までを前半とし、三田谷から果無峠を越えて熊野本宮大社までの行程を後半とする。大股の集落は、前半の行程のほぼ中ほどにあり、高野山の千手院橋から南下してここで宿泊する人もいる。

また二百名山のひとつである伯母子岳にのみ登る人も多く、大股はその起点となる場所だ。小辺路を歩いてみた

いと思ひながら、なかなか実現できない。五月の連休の半ば、大股から伯母子岳を往復することにした。

車を降りて準備をしていると、年配の女性が通りかかり、「朝からようけ上がったよ」と言い、「私らこんな近くに住んどつても上がったことないわ」と続けた。そんなものかもしれない。集落の入り口の駐車スペースには、車がたたくさん駐車されていた。京都から来たご夫婦が準備をしていて、行程が同じだと話すと、「今日一日よろしく」と見送ってくれた。

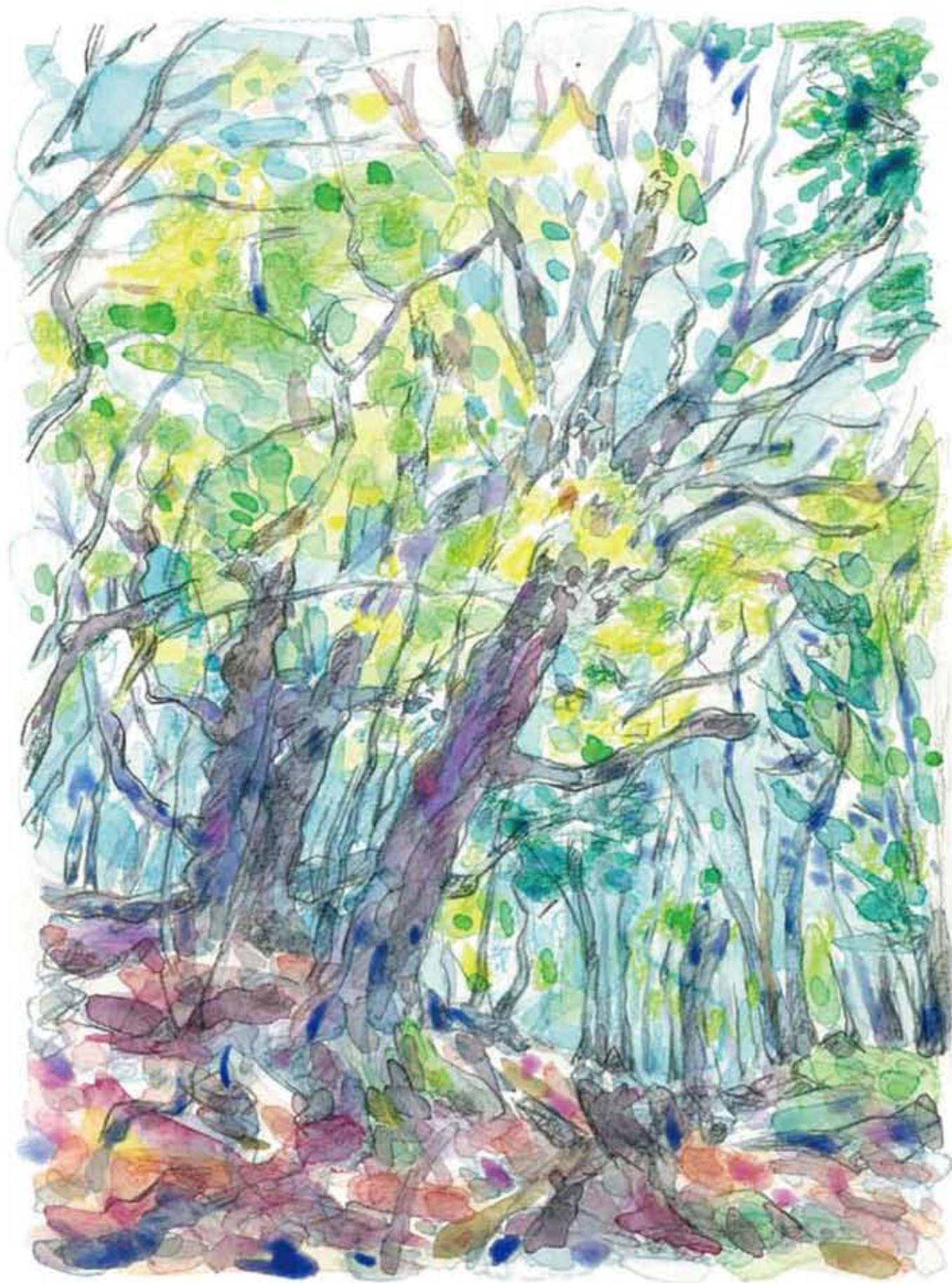
急な斜面にある大股の集落と、その集落を見下ろす墓地を抜けると、杉の植林の森が始まる。九十九折の急な登山道をゆっくりと登っていった。ポポッ、ポポッというツツドリの声が聞こえてくる。

直線的な植林の木立に飽き始めた頃、登山道には赤松やクヌギ、カエデと

いった木々が現れる。新緑の緑がまぶしく、青い空がそれらを取り囲んでいた。登山道は、ほぼ同じ傾斜で、植林と自然林とを行ったり来たりした。高野山方面から大股に下山してきた男性が、早いペースで追い抜いていく。

一時間ほど歩くと、萱小屋跡に到着した。この場所は「かつて茶屋や住居、畑などがあつたが、現在は居住している人もおらず、住居もない」という予備知識があつたが、驚いたことに広い平坦地には立派な避難小屋があつた。

地図にも書かれていないこの避難小屋は、ログハウス風で手作り感満載。ここを大切にしている人がいることや、その人達はきつと、この小屋を楽しみながら造つたんだなと思わせた。中に入って小屋の中を見回していると、途中で追い抜いていった男性が、中で昼ごはんを作り始めた。すっかりくつろいでいる風なので、ここに泊まるのか



▲萱小屋後を過ぎて、検峠を目指して歩いていく。新緑の木々を夏のような強い日差しが照らし、青い空が木々を取り囲む。

楽

RAKU

ウィリアム・メレル・ヴォーリズの心

今を生きる日本人にとって、必要なもの。幸せとは…。日本人を愛した、ウィリアム・メレル・ヴォーリズの足跡を辿り、本来あるべき人の営みとは何かを考える。

第24回 東華菜館を訪ねて



東華菜館 千修海氏

梅雨も明け、京都の夏の風物詩「祇園祭」が終わった夏真っ盛りの日、東華菜館を訪ねた。東華菜館は阪急京都線河原町駅と京阪本線祇園四条駅にもアクセスが便利な四条通にある。高校生の頃、画学生を目指していた私は、よく奈良から近鉄電車を京阪電車に乗り継いで四条駅に降り立ち、京都市立美術館に出かけ、帰りには必ずと言っていいほど四条界限を散策した。その頃、鴨川沿いの洋館がヴォーリズ建築だとは知る由もなかったが、この洋館が鴨川や周りの風景に溶けこんでいる様子を京の都の奥深さを感じていたことを憶えている。

いがして「現存する日本最古のエレベーター」なのだと言え、納得してしまふ。

五階から階段で屋上へ。眼下に鴨川沿いの風景が広がり、四条大橋から見えていた塔が目の前にある。この建物を象徴する塔には、エレベーターの機械室が格納されているという。屋上で見ると塔はシンメトリーに建てられておらず、少し四角通りと鴨川寄りに建てられている。おそろく川向こうから見たときに自然に見えるように配慮されているのだろうと話された。

一つ階をさがり五階へ戻る。実は建設当時の設計では五階に部屋はなかった。しかし、竣工間近に急遽増築されたという。現在の五階の内装は修海さんの手により行われた。修海さん曰く「各階に特徴がある中、この階はモダンにしよう」とされたようだ。修海さんのこだわりが自然とこの建物らしい設えとなっている。四階は、元来の建物の面影を多く残している。この階で特筆されるのは単なる「オリジナル」ではなく使



海や山の食材をモチーフにしたテラコッタ



OTIS社製の現存する日本最古のエレベーター

時計針式フロアインジケター
(数字の間隔がフロアの高さに比例している)

2階奥の調度品



千氏がこの建物に合わせて作ったコートハンガー



個室(2階)



個室(2階)

四条大橋を渡り東華菜館の玄関に立つと海や山の食材をモチーフにしたテラコッタが迎えてくれた。扉を開け店内に入る。真夏の日差しが明るさから一転してそこには重厚な空間が広がっていた。それは重々しいと言う意味ではなく、川面に反射した光も影響しているのだろうか。夏の日差しがワントーン抑えられたような優しい趣のある空間だった。

店内を見回していると左手にある待合室から店主の次男である千修海さんから「お待ちしていました」とお声掛けをいただいた。

暫しの歓談のあと、一九二四年にアメリカで製造された(OTIS社製)エレベーターで最上階へ。エレベーターの操作は運転手にしてもらった。扉を開け閉めするガチャガチャガッちゃんという音。その様子を見て今のエレベーターにない当時の匂